

## 新しい時代の学校施設の在り方に関するこれまでの主な意見

### <主な検討事項及び論点（案）について>

- 学校設置者は、これまでも防災、コロナ、GIGA、少人数、バリアフリーや長寿命化等、様々な課題に個別には一生懸命対応しているが、それらが有機的にどのように教室の在り方につながるのかまとまらない状況であり、部会での議論に期待したい。
- 個別最適な学び、GIGA スクールを実現するためには、1人1台端末の確保や通信速度が重要。例えば、教室に60インチの大きい電子黒板を置いた上でさらにソーシャルディスタンスを確保するには、空間的に余裕がない。端末を単に配るとのこと以外にどのような環境整備をするか検討が必要である。
- インクルーシブ教育システムの観点から様々な取組がまとめられており、様々なところで議論されている内容が集約される形で取り込まれていることに、非常に期待を持った。障害のある子がどうというよりは、全ての子供に対してどういうふうな教育をこれから進めていくのかという観点が基本にありながらこれからの議論が進んでいくことに期待したい。
- コロナ禍を通じて、壁を取り払った屋根だけの空間や、庇を長くして子供たちを集めることができるオープンエアの空間があっても良いと思った。木陰の下で先生と子供たちが学ぶような自由度のある発想で、検討部会に期待したい。

### <新しい時代の学びの姿について>

- これからの学校教育は、社会発展のために必要な資質・能力が、指導の結果、いかに子供たちの身につくかが重要。
- 個別最適な学びの中では子供たちが主体的に学ぶことが、協働的な学びの中では意見を交わしてともに高めていくこと、学ぶ大切さを味わうことが重要。
- 新しい時代の学びは、個別最適な学びと協働的な学びの往還であり、現在の一般的な授業形態の中でも相応にあるが、その中でのICTの可能性を探っていくと、これまでの割合が変わることが考えられる。
- 新しい学びというのも、1単位時間を前提にして、1単元を前提にして、1教科を前提にして、そして教育課程を前提にして、幾つかのレベルを前提にしながら、それを構造的に組み合わせていくという形で、新しい学びの在り方を捉えていく。そこにICTというツールをどういうふうに通していき、新しいアイデアが出てくるかどうかというあたりの、そんな組立て方ということが考えられる。
- 今までの一斉授業や学級集団での志向など、板書も含めた授業文化はそう簡単には変わらないと思うが、今後はその割合も変わる可能性がある。
- 授業文化は非常に大切であり、それは一斉授業をどう定義するかであり、先生の立場に立って認識することが大切である。
- これまでも指摘されてきたが、授業で大切なのは問題解決の在り方。日本の先生の得意技は、1人では達し切れないところを、互いのコミュニケーションを通しながら、そ

それぞれの子供を高みに到達させることであり。よって、新しい学びを生み出すということが大切である。

- タブレットを使った授業では、共有、シェアがキーワード。今までは先生が情報の発信源であった授業が、先生からだけでなく児童生徒の間や外部の方からでもタブレットを介して色々な情報が自由にシェアしやすくなってきている。
- タブレットでは一人一人に対して同じ情報が同じ大きさに映る。目の前できちんと見えながら授業をできるため、理解度が随分違ってきており、そこはオンラインのメリットだと感じている。
- 空間に集まることの価値を問い直す時代が来ている。学校は、学齢が小さいほど周りの人がやっていることを自然と身に着けるといったことに価値がある。
- ICT 教育環境は自然と学習環境に浸透していくような配慮が必要。

### <新しい時代の学びを実現するための学校施設について>

- これまで教室を設計するときには、黒板が児童生徒によく見える角度であるのかとか、光はうまく入っているのかということを考えてきたが、これらはタブレットで全て対応できてしまう。一方、教室の中で生身の人間が同じ環境をシェアしているときにできることに対して、どういう環境をつくってあげるかというような見方が必要になる。
- 諸外国では最初から一斉に教えることは重視せず、多様な学習活動を中心に机の配置等を決めている。新しい時代の学びの実現には、普通教室を拡大させ、どのような機能を持たせるかが課題と考える。
- 学校の中でタブレットやパソコンを使って理解しながらも、みんなで集まり、空間的、身体的に共有してやっていくということの切替えを今後どう考えていくのかということが重要である。
- これからは、従来の一斉講義型授業で前を向く形式とは明らかに違った場面が増えてくるので、例えば教室の大きさや形態がどう関わってくるかなど、今までの概念ではない学習環境を議論する上で非常に大きな転換期である。
- 学校施設が変わると教え方が変わるという経験をしている。学校施設が変わっていくことで、学びが良い方になってほしい。
- 地域や学校外の人たちと情報交換をする際、単にオンラインでというだけでなく、子供たちが外にも出て行くし、外の人たちが学校の中にも入ってきやすい環境づくりも大切ではないか。地域の拠点としての学校の在り方を積極的に考えていくということ、両方のメリットをどのように生かしていくのかということが重要である。
- 長寿命化と短期的な取組みを分離させずに、これからの学校施設の在り方を考えていく必要がある。
- 教室に入れなない生徒に対して、そういう子供のためにパーティションで仕切れる部屋やカウンセリングルームのインターネット環境の整備が必要であると考えます。
- 子供たち全員が同じことに気付くような場ではなく、それぞれがそれぞれに感じられ、学校の空間全体が教育の場となるのが良いのではないかと。

- 学校は地域住民にとっての心の拠り所であり、地域の拠点として、コミュニティを強め、いざ災害があったときの安全安心の拠点にもなる学校をつくるべきと考える。
- 新しい学びに対して、1単位時間の枠、クラスという集団の枠、教室という空間の枠をどう捉えるのか、さらに学校という場をどう捉えるか。既成の枠を一回取り外したところにどんな学びの可能性があるか、そのための施設像が描けるのかということについて、自由な発想のもとに今後議論を重ねたい。
- 都心部を中心に、学級数が増えている学校もある中で、そもそも新しい教室を確保できるのかということも課題となっている。
- 小学校の35人学級など子供たちにとってきめ細かな教育が進む一方で、教室が増えることにより、各学校の実情に応じて、モデル的な取組が全ての学校に広げていけるのかというところは課題であると考えます。
- 学校は数が多く、とにかく既存施設が膨大にある中で、それに対してどう新しい学校施設づくりの課題に応え、実現していくかということも大きなテーマである。